

リクドローは大臣を籠絡し、ミリアの傍付兵士の地位を手に入れた。

これでもう一日中、つきまとうことができる。

追い返そうとするミリアから、一本取った形だ。

ただし、これは前哨戦にすぎない。

ミリアからヴェステルの巫女になるという了解をとって初めて、真の勝利である。

そして、これが最高に難しい。

(まずは取りつく島を作らなきゃ、話にならんよなあ)

そのためにも、ミリアのことをもつとよく知るのだ。

「神々を恨んでいる」とか「王権を復活させたい」だとか、漠然としたことを、人伝ひとづつてに聞くのではなく。

本人を直接見て、何を好み、何を嫌い、何が琴線に触れ、何で強く心動かされるのかを知る。同様にミリアにも、リクドローのことをもつとよく知ってもらう必要がある。

「ほく、わるいかみさまじゃないよ」と理解してもらおうのだ。

なんだかなあ、と思わないでもない。

(これじゃまるで、正面からかき口説くのと、労力が変わらんよなあ)

もう若い時みたいないな元気がないと、ギリオンに言ったばかりなのに。

まあ、致し方ない。

リクドーはこの百年を昼行燈ひるあんどんで暮らしてきたから、「ここらでがんばれよ」という運命の揺り返しだと、諦めるあきらことにしよう。

と——そんなことをつらつらと考えながらリクドーは、謁見えつけんの間におけるミリアの立ち振る舞いを、眺めていた。

今日一人目の陳情に、彼女は肘掛けに頬杖ほおづえついて耳を傾けていた(多少、やさぐれているのは、リクドーのせいであろう)。

「このクソガキに、最高級のメロンを盗まれたんでさあ！」

と、悲劇の主人公ばりに訴えていたのは、八百屋の親父おやじだった。

十歳くらいの少年の、首根っこをつかんでいる。こっちが犯人だろう。

「もうオレの腹に収まっちゃったからな！ 返せやしねえぜ」

と、なかなかふてぶてしい。

八百屋の親父は訴えを続けた。

「親に弁償させようと思つたら、これがまたとんでもねえロクデナシで！ 子どもがやったことは、子どもに責任とらせるの一点張りなんでさあ！ あたしやもうどうしていいか、参つて参つて！ ミリア様からなんか言つてやつてくたせえ！」

「うーん。まあ、メロンの代金はうちの兵士に、親から取り立てさせてもいいんだけど……。再発を防止できなきや、問題解決つて言わないわよねえ」

「ええ、ええ。あたしも金だけじゃ溜飲りゆういんが下がりませんや」

八百屋の親父が期待に満ちた顔つきになる。

「ケツ。テメエんところは太儲もうけしてんだからよ。可哀かわい想そうな子どもにメロンくらい恵んでやつたつて、バチは当たらねえだろ？」

クソガキ様は反省の「は」の字もない顔つきで不貞ふてくさ腐れる。

ミリアは苦笑交じりの困り顔になつて、大臣はかに諮かつた。

「こういう場合つて、どうだったっけ？」

「……畏おそれながら申し上げます、殿下。我が国の刑法では、窃盗おその処罰は『棒打ち十回』と定められております」

「「え……？」」

ミリアと八百屋の親父、クソガキが一樣に絶句した。

それから、ミリアはおずおずとなつて訊たずねる。

「こ、こんなちっちゃな子を、棒で十回も叩いたら……」

「恐らく、命はないかと」

「……」

ツバを飲み下す音が、三つ聞こえた。

クソガキ様はもう半泣きだ。立っているのがやっとという様子で震え上がっている。

一方、八百屋の親父も真つ青まおになつていた。おろおろとなつていた。顔にありありと書いてあるのだ。「何もそこまでは怒つていない」と。「この子が可哀想だ」と。

謁見の間に、凍りついたような空気が張りつめる。

それをミリアは、わざとらしい咳せき払いで溶かした。

「こ、こういうのはどうかしら？ ほうやがもし反省して、二度と盗みはしないと誓うなら、特別におしりぺんぺん十回で済ませてあげるってのは？ もちろん、親父さんが認めれば、だけど〜」

「あたしはそれでけっこうです！」

「オレも二度としません！」

親父がクソガキの尻しりを十回ぶつとということ、手打ちになつた。

ミリアはそれをしっかりと見届け、一件落着を告げる。

兵士の一人を呼んで、メロン代金の取り立ても命じ、二人と一緒に下がらせる。

親父は安心顔で、クソガキは尻を押しさえつつも感謝顔で、謁見の間を去っていった。

「は。心臓に悪かったわ」

ミリアが胸を撫で下ろした。

隣の大臣も首肯し、

「ですな。我が国の第一王女殿下は、窃盗の処罰内容程度も忘れてしまったのかと、気が気で
はございませんでした」

中年男にしか出せない茶目つけたっぷりに、片目をつむってみせた。

「いや、私としたことが、うっかりだったわ」

とミリアも屈託なく笑う。

そんな、一連の様子を傍観していたリクドーは、

(ちゃんとすっかり国王代理やってんだな。この若さだよ)

感心頻りで相好を崩した。

本日はあと四件の陳情があったが、全てミリアがちゃきちゃきと問題解決してしまう。

謁見の時間が終わり、リクドーは拍手を送らずにはいられなかった。

「やるじゃん！」

「ぶえつにい」

でも、ミアアは不本意そうに唇を尖らせた。

照れ隠し、というわけでもなさそうだ。

「豪商同士で採めに採めたとか、水利権で衝突して村が抗争一歩手前だとか、難しい、大きな案件は誰も陳情に來ないもの。みーんなミトロツカの神殿まで行って、訴え出るもの」

ミトロツカを聖域とするバシリウスは、オードランの従属神で法の神だ。

「我が王家の信用が、まだまだその程度って話よ。まあ、ほやいてばかりもいられないわ。あーんな遠いとこまで行かなくていいんだってわかってもらえるように、私も地道にがんばり続けるだけよ」

玉座の肘掛けに右手で頬杖をつき、そっぽを向き、皮肉っぽく左の肩を竦めた。

不貞腐れた態度だが、虚空をにらみつけるようなその眼光は、とても力強かった。

今日のお裁きも合わせて、こいつならいつかやり遂げるんじゃないかと、リクドローに思わせるものだった。

なるほど、王家の権威を取り戻すというミアアの志は、口ばかりじゃないと知った。

十

昼食は厨房でそのまま、皆と食べた。

なんとミリアも兵士や女官たちと交じって、同じ食事を摂っていた。

ふかしたジャガイモと茹でた野菜に、溶かしたチーズをかけて食べる、美味しいけれどごく庶民的なメニューだった。

昼食後は、城下の視察に行くのがミリアの日課だという。

「あんたもついてくるわけ？」

ほっかむりをしながら、ミリアはイヤそうに言った。

服は謁見の時間が終わつた後とつくに、町娘のような格好に着替えていた。

「そりゃ俺は、お姫サンの護衛だからねえ」

「フン、好きにすればっ。ただしうちの兵士だっていうなら、絶対に神様ヅラしないでよ？」

「いいけどなんで？」

「私なんか善行を積んだ時、一緒に神様がいたら、王家のありがたみが薄れるでしょうが！」

「……ごもつとも」

リクドーは神様ヅラしませんと誓った。

ともあれミリアと二人で、王宮を後にしたのだが――

「馬車とか使わないんだな？ 仮にもお姫サンなのに」

「ハッ。馬なんて上等なモンが、うちにいるわけじゃないでしょっ」

「……それくらい、下心なしでプレゼントしようか？」

「要りません、あんな大飯喰らい！」

ミアは腰に両手を当て、ヤケクソ気味に威張った。

「いい？ 人サマには立派な二本の足がついているの。歩きやいのよ、歩きや！」

「清貧でけっこうなことですが、それだと王家の権威も丸潰れでは？」

「だからこうして人相を隠してるんでしょうが！」

と、ほっかむり姫はのたまった。

そのまま本当に、城下の目抜き通りを大威張りで闊歩していく。

リクドーは周囲の様子を窺った。

行き交う行人が、ほっかむり女に向ける眼差しを観察する。

(ぶっっちゃけバレてるよね、これ?)

恐らく、もう公然の秘密というか、第一王女のお忍びは有名になっているのだろう。

旅の者や交易商たちはともかく、住人は確実にミアアの正体に気づいていた。

わかった上で、クスリとしつつも、知らんぷりをしていた。

(愛されてんなあ……!)

普段、王都には来なかったから、リクドーはこんな実情、知らなかった。

そしてこれだけ見ても、ミアアが善政を敷いているのがわかる。

それも、お城の上からあれこれ指示を出すだけのやり方じゃなく、市井に交わりつつ、互い

の顔が見えるようなやり方だ。

リクドーにとつても好みの政治だ。まつりごと

ミリアが最初に訪れたのは、焼き菓子を作って販売する店だった。

バターのいい匂においが立ち込めている。

既に話がついていたのか、ミリアは妙齢の店主に様々なお菓子の作り方を習い、またほっかむりのまま売り子を手伝う。

「あなたもボサツとしてくるくらいなら、手伝いなさいよ！」

「お、おう」

リクドーももう長いこと神をやっているが、クッキー作りなど体験したのは、実に初めてのことだった。

生地を捏こねて耳たぶくらの柔らかさにするのが、気持ちいい。

あと妙に無心になれる。

そして、特に大過なく三時間弱ほど働いて、次の視察へと向かった。

賃金というかお土産に、焼き菓子をどっさりともらった。

「あゝん、やっぱここのは格別だわ♡」

「ミリアが道中、お行儀悪くパクついては、もふもふと喜んでい

「……まさか、これが食べたかっただけか？ 視察つてかアルバイトみたいなもんか？」

「まー、それは否定しないけどお」

「しないのかよ！」

「でも、ちゃんと視察にもなってるのよ？」

「試みに訊きくけど、どの辺が？」

「リクドローは疑惑の眼差しを向ける。」

「ただ普通に製菓と販売を、手伝っていただけにしか見えなかったのだ。」

「だけどミリアは、ごく平然と答える。」

「庶民の食生活が豊かであるためには、バターの安定流通は欠かせないわ。最近、特に値上がりしたとか、そういう愚痴をお店で一切聞いかなかつたでしょ？」

「……確かに視察だな」

「ミリアを見るリクドローの眼差しが、意味合いを変えた。」

「そゆこと。つまりはこの、惜しげもなくもらえたお土産の味は、民の幸せバロメーターつてわけよ！」

「ミリアは無邪気に、でも誇らしげに、確認してみなさいとばかり、クッキーを一つつまんで、リクドローの口元へ突きつけてくる。」

リクドローが躊躇ちゆうちゆうしたのは一瞬だけ。

(俺も若かったころはこういうの、むやみやたらと照れ臭かったな)

少し懐なつかしく思いつつ、口を開けて食べさせてもらった。

リクドローはあまり焼き菓子の類たぐいを好まないが、天火オーブンで焼き上がったばかりのこれはイケた。ふんだんに使われたバターゼイタクの甘みが贅沢な味だった。

次に視察に訪れたのは、町の子どもたち相手の私塾。

義務教育はおろか、まともな学校もほとんど存在しない時代なので、人々はこういうったところで読み書き算数を覚える。

直前に、ミリアはほっかむりを外した。

聖なる指輪で印字を切ると、光を操あやつって反射させることで、中空に鏡を作り出す。

鼻歌交じりに髪型をセツトし直すミリアを見て、

(器用に使うやつちやな)

とリクドローは驚嘆した。

長年、秘法アルカナに精通した神や眷属ガイズならともかく、ミリアはただの人間なのだ。聖なる指輪はいわば簡易版秘法アルカナともいふべきものだが、光を操るといっても常人ならば、暗いところに光源を

作り出すとかがせいぜいのはずで。

ミリアは巫女に選ばれるほどなのだから、^{アウラ}霊力が常人よりずば抜けているのは確かだが、地力を操る才にまで長^たけているようだった。

ともあれ――

ミリアは気のすむまで身だしなみを整え、ゴージャスお姫様然となる（服装を除く）と、「お邪魔するわね〜」

ものすごい猫撫で声を作って、玄関から入っていった。

すぐの広い土間が教室で、机が並べられており、子どもたちが熱心に書き物をしていた。下は六歳くらいから、上は十五歳くらいまで。

ミリアに気づくなり全員が机を立て、

「キヤーーツ、お姫様だわーっ」

「ミリア様ーっ」

「こんにちは！」

すごい勢いで群がってくる。

リクドーは^{けお}気圧されるほどだったが、ミリアは慣れたもので、「みんなイイ子で勉強してた？ 今日もお土産があるのよ〜」

もらったばかりの、食べきれないほどの焼き菓子を、子どもたちに配った。

すごい使い回しを見た！

（いや、違うか。最初からこうするつもりで、視察の順路を練ったのか）

お姫様から施しを受けた子どもたちは、美味しい焼き菓子にすっかりご満悦である。

ミリアも子どもたちと他愛無い雑談をしつつ、優しく美しいお姫様を完璧に演じている。

無垢な彼ら相手に「素晴らしい王家」をアピールしまくり。

ほかむりをとるはずだ。

服装は町娘のそれだが、まあ「お忍びだから」というエクスキューズは立つだろう。

私塾の先生らしい、これまた善良で品の良さそうな老婆が、ミリアに礼を言っていた。

「いつもお氣遣いをいただいて、申し訳ありません。ミリア殿下」

「構いませんわ。こちらこそ毎度、安物ばかりで申し訳なくて」

「とはいえ、これだけの量となりますと、それなりに……」

「我が王家が民を愛する気持ちに比べれば、これくらいなんでもないことですわ」

あくまで買ってきたという態度をとる、見栄っ張りのミリア。

あげく、

「子どもたちは我が国の宝ですもの。いっぱい勉強して、将来は学者さんとかになつて、せ

ひ神殺しの方法を発見して欲しいわ」

一瞬、目に不穏な光を灯らせていた。

この場でツッコむわけにもいかず、リクドローは苦笑させられつつ——ふと気づいた。

子どもたちの中で一人だけ、ミリアに近づこうとしない少女がいる。

呆れ返ったような目で、猫を被りまくったお姫様を眺めている。

よく見れば、ミリアと面影が似ている。

彼女が何者か、リクドローはピンと来た。

あちらも同じくか、リクドローの傍へそそくさとやってきて、

「初めて見る兵士サンですけど、その少年のようなお顔で泰然、超然たる立ち居振る舞い。もしかして噂のリクドロー様ですか？」

「そういう嬢ちゃんは、フィーネリーア姫かな？」

「はい、ぜひフィーナとお呼びください」

小声で挨拶を交わしつつ、フィーナはさすが幼いながら、姫君に相応しいお辞儀をした。

やはりミリアの妹だったらしい。この私塾に通っているらしい。

「あの姉ちゃん見て、正直どう思う？」

「いつものことですが、鳥肌モノです」

フィーナは実際に、二の腕をさすってみせる。

ズケズケ言うのはこの姉妹の共通項らしい。

「それより、リクドロー様。城で聞いたのですが、姉をヴェステルの巫女にご所望とか？」

「姉ちゃんにはすげなく断られまくりだけどな」

「あたしでは巫女は務まらないでしょうか？」

まさかの売り込みをかけられた。

「……ごめん。そういうわけにはいかなくて」

「残念です。しかし、もしご要望の折には、ぜひいつでもお声をかけてください。全身全霊でお仕えさせていただきます」

リクドールの記憶では、フィーナはまだ十三歳のはずだが、しっかりしたオコサマというレベルを超えていた。

口調はやや舌足らずだが、言葉遣いは大人びている。

「……何？ 巫女に興味あるの？」

「あります！ 贅沢ざんまい三昧さんまいさせてもらえるとか！」

「……ホントしつかりしてね、君……」

「ありがとうございます。それにアーダヴァイレルト家から巫女を輩出すれば、それこそ王家はくに箔はくがつくとあたしは思うのです」

「……君のお姉ちゃんも、それくらいものわかりがよかつたらねえ」

「姉は頑固で、意固地なところがありますから」

どちらが姉かわからない論評を、フィーナは口にした。

「理屈がわからないわけじゃないはずなんです。ずっと神様たちのことを恨みに思っていたから、素直になれないだけです。姉は自分のことをバカだと思ってますけど、決してそんなことはありませんし、何より他人の気持ちや立場がよくわかる人です。すぐにはリクドール様の神意にこた応えられないと思いますけど、根気よく姉につき合っていただけではないでしょうか？」

そう言ってもう一度、深々とお辞儀をした。

「あんな姉ですけど、よろしくお願いいたします。リクドール様」

リクドールは返事代わりに、そのお利口な頭に手を置き、撫でてやった。顔を上げたフィーナが、歳相応としのうれしそうな表情を浮かべる。

否、いな浮かべたのも束の間つかま——

「ところでウチのフィーナは、毎日ちゃんとお勉強してるかしら？」

「ちよっつつ、姉様やめてよ！」

「フィーナちゃんが一番の優等生かなー」

「ねー。すぐくオトナっぽいしねー」

「まああ、そうなんだ。お城じゃいっつも腹出して寝てるのになー」

「プライベートの暴露はアウトでしょ姉様。あたしのお腹なかはどうでもいいでしょ」

フィーナは大声で怒鳴ったが、ミリアの悪意なき暴走は止まらなかつた。

私塾での様子を身内あねに根掘り葉掘り聞かれ、王宮いえでの様子を学友に暴露され続けるという、フィーナにとっては地獄の羞恥プレイだ。

つかみかかって止めようにも、ミリアの周りは子どもたちが十重とえ二十重はたえに取り巻いているので、そもそも近寄れない。

フィーナは全身をわななかせながら、その拷問に耐えるしかなかつた。

「……あのデリカシーのない女を、どうか見捨てないでください」

そう言う少女の、怒りと羞恥で引きつった顔が、リクドーにはひどく印象的だつた。

ミリアは小一時間ほど子どもたちとしゃべり（フィーナを自覚なくいたぶり）、先生とも談笑し、満足した様子で私塾を後にした。

夕暮れ少し前の時間。

優しい春の日差しは、どこか儂はかなげなものとなつて、王都の中通りを照らす。

並んで歩きながら、ミリアが訊ねてきた。

「今の塾、どう思った？」

「繁盛してんな」

さすが王都だからか、老婆一人で切り盛りしているらしい私塾にしては、子どもが多かった。

「うんうん、そうなのよ！ でも、他には？ 先生ほかのことはどう思った？」

「正直、おまえの妹の印象しかない」

「ハア？ あんたまさかロリコン？」

「ちやうわ！ つか、しょうがねえだろ。俺はあのバアサンと直接話す機会もなかったし、こっちからズカズカ踏み入るいわれもないし」

老婆が温かい笑みを浮かべて、上品にミリアと談笑している様を、遠目に眺めていただけだ。

「まあ、それはそれなりに、わかったことならある」

「例えば？」

「おまえ、あのバアサンにいろいろと習ったんだろ？ それもけっこう長く」

「……正解。どうしてわかったの？」

「今の話の流れからと、あとはそうだな——」

リクドーは問われるままに説明した。

フィーナと少し話し込んだことで、リクドーは思ったのだ。

ミリアとは性格が違うように見えて、根底には似通ったものを感じる、と。

姉妹だからそれは当然かもしれないが、見過ごせないのは、姉妹とも年齢の割に大人びたところがある。つまり、しっかりとした教育を受けている。

そして、その教育を同じ人間から受けたのだとしたら、性格が似てないミリアとフィーナの根底に、似通ったものがある理由がすっきり説明つくというわけだ。

「あのバアサン、上品ぶってたけどな。けっこうズケズケ言う、キツイ性格なんじゃねえの?」
「……それも正解。怒らせたらとっても恐いのよ。けど、よくそこまでわかるわね?」

「まあ、年の功ってやつで」

ミリアと同じ年でも通るシワ一つない童顔に、リクドローは神生じんせいの年輪を感じさせるような、苦み走った笑みを浮かべた。

ミリアは納得したような、妙に悔しそうな、いわく言い難い顔つきになりつつ、

「先生はね、元々は父様の乳母だったの」
前を向いて歩きながら語り出した。

「旦那さんもすごい賢者で、夫婦で王宮に仕えていてくれたわけ。先生自身もとても博識で、旦那さんが亡くなった後は父様の相談役として、私とフィーナの教師役として王宮に残ってくれたわ。でも、私が十二歳の時に一度、倒れたの。栄養失調で」

「あの歳でそれは恐いな」

「でしょ? 父様もそりゃ心配してね。原因を調べたんだけど、ポラリスで働いている先生の息子さんが、大怪我けがしてたのよ。治療費はくたいが莫大ばくだいかかって、先生はただでさえ薄給だったのに、いっばい仕送りしてたの。父様はそれを知って、でも、ない袖そでは振れないし、これ以上のお給

金は出せないから、先生に城を去るよう勧めたわ」

「それで私塾を開いたら大繁盛、と」

「うん……。私も十三歳までは通ってたんだけどね。他の子たちと一緒に机を並べると、なんだか、ね……。『私の先生なのに、皆にとられた！』なんて思っちゃって。悔しくて。あはは、私も子どもだったな」

「……でも、それだけ先生のが好きだったんだろう？」

「うん！ だからよ。なんでうちの王家は、あんなにステキな先生に、いっぱいお給金を払えないんだらうって、私が本気で調べたのは」

「……そして、王権復古を目指し、神様を恨むミリアさん爆誕に至る、と」
こりゃ根が深いと、リクドーは内心でこぼした。

——根気よく姉につき合っていただけじゃないでしょうか？

フィーナの言葉がなかったら、もっとへこたれていたかもしれない。

「というわけだから！ 私を巫女にするの、もう諦めたら？」

「おー。考えるわー。迷うわー」

軽口を叩き合いながら、徐々に赤みを帯びる道を歩いていく。

「今日の視察はあと一件ね」

「最後はどこだ？」

「材木ギルド！」

夕方のこととは思えない潑刺さで、ミリアは言った。

若いって眩しい。

十

王都エーンケスターは、もともと森林地帯を切り拓いて作った土地柄であり、周囲にはまだ未開拓の古く深い森が残っている。

ゆえに昔から林業は盛んで、国中の関係者で構成される材木組合も、なかなか大きい。

その上でミリアは言う。

「私、一年前から林業に注目してるのよね」

ギルドと組んで新しい商売を始め、上手くいったらアガリをもらう手はずなのだという。

この時代にはまだ職種として定着していない、コンサルタント業だ。

「商売がいいわよね。成功したら儲かるし、お客さんは満足感があるってことでしょ？ 国の発展につながって、民の生活が充実して、しかも我が王家が潤うとなると、こりやもう

万々々歳なわけよ。私としてはこの調子で、いろんな商売に携わっていきただけで、まずは話に乗ってくれた材木ギルドと一緒に大成功して、実績を作りたいわけ」

「具体的には、いま何をやってるんだ？」

「国の内外に大きな銭湯を出店してるの」

「それはまた、意外なところを突いてきたな」

「あんたもヴェステルに住んでるならわかるでしょ？ 大きなお風呂って気持ちいいわよね。でも、温泉はどこにでも湧いてるわけじゃないから、そこで銭湯の出番よ」

この時代の一般家屋には、風呂すらないのが普通だ。

代わりに庶民は桶かげに水を張り、聖なる指輪の力で湯を沸かして手拭ぬぐいを浸し、それで体を拭いて清潔を保つ。

大きな町なら銭湯もあるが、そんなのごく一部。

また、蒸し風呂文化の存在する地方はあるが、それもごく一部。

「だから『近所に銭湯があったらなあ』って思う人は、けっこういるはずなのよ。お風呂の素晴らしさを知らない人たちでも、最初は無料で使わせてあげたら、一発でハマると思うのよ。

私たちの手で銭湯ブームを起すのよ！」

そして、新たな銭湯を建てるには、たくさんさんの材木が必要だ。

ボイラーを沸かし続けるにも、大量の薪まきが必要だ（聖なる指輪では、大浴場を常時、沸かし

続けられるほどの力はない。

その両方が材木ギルドなら、原価で用立てできるといふ寸法だ。

「でも、流行はやったら流行はやったで、すぐ真似まねされないか？」

「銭湯がいっぱいできるなら、それだけ材木需要が高まるってことじゃない。儲け口じゃない」
「なるほど、それは確かに」

「しかも、新たな快感に目覚めたお客さんたちに、ささやくわけよ。『銭湯もいいですけど、ヴェステルの名湯秘湯に浸ひたかりたくはありませんか？』って。これは我が国だけの強みでしょ？ 観光業の振興もできるわ！」

「……………！」

リクドーは思わず刮目かつもくして、ミリアを見つめたのだった。

材木ギルドの本部は王都の商業区にある。

事務的で素っ気ない、しかし大きな屋敷だ。

特に玄関ロビーは広く、椅子いすやテーブルが用意されており、別に用事はなくとも材木商たちが集まって、歓談できるようになっている。

ミリアはそこで商人たちに交ざり、自慢の茶や菓子を振る舞われていた。

普段、利のみでしか動かないはずの彼らが、ミリアを前にすると、まるで孫や娘に対するように、屈託のない笑顔を見せる。散々に可愛がる。

(あいつはどこ行っても、人気者だなあ)

リクドローは壁に背を預けて見守りながら、感心する。

でも、理由はわかる。

ミリアは王家復権のために精力的な活動を行っているが、「アーダヴァイレルト家さえよければいい」という類の考え方を全くしていない。

むしろ本気で民を愛し、また国中巻き込んで、一緒に繁栄していきたいという願望が強いように見える。

計算なのか、天然のお人好しなのか——まあ後者だ。

そして、それが相手にも伝わるから、ミリアもまた愛を返してもらえるのだ。

心からの笑顔で、材木商たちとおしゃべりしている彼女を眺めていると、リクドローもウズウズしてくる。

ミリアがイヤがるから自重しているが、自分も一緒にあそこへ交ざって、茶を飲み、菓子をつまみ、他愛無い雑談に興じたい。

(ああ……そうか)

リクドローは気づいた。

民と交ざって語らう王女の姿を見て。
そこに自分を重ね合わせたいという想いおもを顧みて。
自分とミリアは本質的に、似た者同士かもしれないと。

「いったいどれだけ上古のことであつたらうか。

「神々われわれにとつて、人間ひととはなんぞや？」

そう広く問いかけた、若い神がいた。

多くの神々がそれに答えた。

曰く、「路傍ろぼうの石」

曰く、「虫ケラよりは上等なもの」

曰く、「下僕」

曰く、「慈悲をかけてやるべき、哀あわれなる定命じようみょうの者」

誰も彼もが似たり寄つたりな答えを返す中、リクドーひとりだけがこう答えたのだ。

曰く、「友達になれたらいいんだがなあ」

——と。

リクドーはつらつらと考えながら、ミリアを見守り続ける。

彼女は今、中央大陸アルルカーンから来たという交易商の話を、熱心に聞いていた。

「やはりローズウッドは、ここ南大陸デナインの特産ですからなあ」

と、彼は長年、カカフタフ地峡を行ったり来たりしているのだと話した。

「私はこのエーンケスターを出たことがないんだけど、やっぱり長旅は大変？」

「はい、殿下。それはもう、いろいろと苦労がございませうとも。ただ……これはご存知ですか？ 半年前くらいにリンスクの湖賊が退治されて、あそこの通行が随分と楽になりました。

カカフタフ地峡を行き来する交易商たちは皆、喜んでおります」

という、その話に食いついたのだ。

少し地理の話しよう。

エーンケスター王国は、南大陸デナインのほぼ北西端にある。

そのさらに北西に、ヴェステル山脈が連なり、それを越えると本当の大陸の端。

リンスク地方という小さな土地と、同名の自治領がある。

領土面積全体として見ても随分と狭い上に、さらに同名の湖（正確には中海）が大きく侵食しているため、有効活用できる土地面積は本当に少ないという特徴がある。

また、中央大陸アルルカーンと南大陸デナインをつなぐカカフタフ地峡を「橋」と見立てれば、このリンスク地方は南大陸側の「橋頭保」といえる部分でもある。

ゆえに両大陸を行き来する交易商たちは、必ずこのリンスクを通る必要があった。

そして、そんな彼らを狙^{むち}つて、リンスクの湖には賊^{ばつこ}たちが跋扈^{ばつこ}していたのだ。これが長らく、交易商や旅人たちにとっては頭痛の種^{しゅ}だった。

湖賊と出くわさない幸運^{うけい}に賭^かけて、湖の上を最短コースで渡るか？

あるいは、巨大な湖を迂回^{うかい}するコースで、自治領ゆえに街道も宿場もろくに整備されていない土地に行くか？

すなわち安全をとるか？ 時間をとるか？——難しい命題^{めいだい}だったのである。

「しかし今ではもう、悩まされることはありません。皆、安全に湖を渡ります」

「ありがたい話^かねえ！ でも、誰^{たれ}が湖賊退治^{たいぢ}なんかしたのかしら？」

ミアは首^かを傾^かげる。簡単なことではないからこそ長年、跋扈^{ばつこ}したのだろうにと。交易商は答えた。

「一年ほど前に、リンスクの湖から神様がお生まれになったそうでした」

「え!? 神様^{かみさま}って新しく生まれたりするの!？」

ミアは素^すつ頓^{とん}狂^{きやう}な声を出した。

その声音には憎^{にく}々^ずしげなニュアンスが含まれており、「ゴキブリ^{ごきぶり}って無限^{むげん}に発生^{はっせい}するの!？」と、言^いっているのと近いものがあった。

それから真偽^{まゐ}を確かめるために、リクドールの方^{かた}を振り向く。

リクドールは離れた壁^{かべ}際^{ぎわい}で、「するする」と首肯^{くう}だけした。

百年に一度あるかないかの珍しいケースだが、地面の底で吹き溜まった惑星そのものの地素^{ガイア}が、ある日いきなり芽吹いて、新たな《龍脈》を創り出すことがある。

すると同時に、そこから神もまた生まれてくるのである。

一年前、リンスクの湖が《龍脈》化したという事件は、リクドーたちも地素^{ガイア}の爆発的波動という形で観測しており、オードランにも報告していた。

「じゃあ、その生まれたばかりの神様が、湖賊を退治したわけ？」

「然様^{さよう}でございます、殿下。しかもそれだけではございません。その神様はすぐにリンスクの治安改善に乗り出し、あの地ではもはや一切の犯罪が起こらなくなったのです」

「一切!? 全く!? ゼロ!？」

ミリアは目を真ん丸にしていた。

為政者の感覚からすれば、絵空事の世界であろう。

「神様ってそんなことまでできるの!？」

「もちろんでございますとも。私は中央大陸^{アルルカーン}にあるゼスカランという地方の生まれなのですが、そこを治める神様も大層ご立派な方で、よく榮えております」

交易商は、信心深い顔つきになって言った。

「はー……それはそれは。でも、にわかには信じがたいっていうか」

ミリアはなぜかリクドーの方を見ながら呟いた。

「嘘ではございません。神々の力の偉大さ、絶大さは、我々俗人の想像の及ばぬところにあるのです。例えば、南大陸デナースにお生まれになった殿下と、遙か遠い中央大陸アルルカーンに生まれたこの私が、こうして意思疎通ができるのも、同じ『クリバラ語』をしゃべっておるからですか？」

「え？ ……うん、そうね」

ミリアはきよとんとなった。

何を今さら当然のことをとばかりに。

「では、クリバラ語の『クリバラ』とは、どういう意味かご存知ですか？」

「……そう言われてみると、知らないわね。改めて考えたこともないし」

ミリアは周りの材木商たちにも「知ってる？」と問いかけ、全員がかぶりを振る。

「言葉の神様の御名なのです」

交易商は、祈りを唱えるように言った。

「そしてクリバラ様は、我がゼスカランを治めておられる神様でもあらせられます」

「へえええつ、そうだったんだっ」

「百年前にクリバラ様が天からご降臨なされ、その神力で世界中の人々が、一夜にしてクリバラ語をしゃべるようになったのです。それ以前では、世界中の人間が一つの同じ言語を使うこ

とは、あり得なかつたのです」

「そうなのっ!? でも、皆がバラバラの言葉をしゃべってたら、すごく不便じゃない? どうやって意思疎通するのよ?」

「然様ですなあ。同じ人間同士で、意思の疎通もできない世界——その方が私どもには、想像がつきませんなあ」

「ああああ、なんか複雑な気分だわあ。世の中をそんなに便利にしてくれた神様も、まさか実在したなんてえええええ」

神様憎しの急先鋒であるミリアが頭を抱えた。

人前じゃなかつたら、かきむしっていたかもしれない。

「犯罪をゼロにした神様に……人と人の意思をつなげてくれた神様……うううう……」

その脳裏では、激しいカルチャーショックを受けているようだった。

自分が絶対悪と信じていたものに、「違うよ」という事実が出てきたら、そりゃ混乱するだろう。受け容れがたい想いで、葛藤するだろう。

そして果たして、ミリアは胸中で如何なる折り合いをつけたか——

「まさか!？」

何かを悟ってしまったかのように、ハツとなった表情で顔を上げた。

ゆつくりと、壁際のリクドールを振り向いた。

じつとりと、非難の眼差しになって言った。

「南大陸デナースにいる連中だけが、そろいもそろって邪神だったんじゃない……」

「言いがかりもほどほどにしろ！」

リクドローは思わずツツコンでしまった。

そのくらいで材木商たちも彼の正体には気づかなかつたが、危うく誓いを破るところだったともあれ、ミリアはわだかまりでいっぱい顔つきになりつつも、交易商に礼を告げた。

「ありがとう。とても面白い話おもしろだったわ。すごく勉強になった。いろいろとね」

気持ちに整理をつけられないまま、今は棚上げにしようという態度。

待ち人が来て、それどころではなくなったのだ。

「お助けください、姫殿下！」

ギルド長である初老の男が、たいそう困り顔で駆けてくる。

その表情のせいで彼の、やり手の商人というよりは「多忙な名譽職を、仲間内から押し付けられたのでは？」的な、気弱そうな印象に拍車がかかってみえる。

ミリアがここへ来たのは、彼に会うためだった。錢湯ブーム計画の進捗状況しんちつじょうを聞くのだ。

ところが彼に先客があつて、話がすむまで待っていたのだが——助けてくれとは、また尋常ではない。

ミリアも硬い顔つきになって、

「どうしたの？ 商談つてわけでもなさうだけど」

「ええ、あんなものは商談とは呼べません！」

ギルド長はまるで陳情に来たかのように訴えた。

「殿下と我々の錢湯ブーム計画に、クレームをつけに来たようで……」

「なんですって!?」 どのどいつよ、とつちめてあげるわ！」

ミリアは瞬間的に怒りを沸騰させると、話も聞かずに飛び出す。

それを慌あわててギルド長が、そしてリクドローが追いかける。

殴り込みをかけるように乱入したのは、商談用の応接間。

さすが材木ギルドだけあり、一級品の木製調度品ばかりが自慢げに並ぶ。

上座のソファに、ひどく肥えた四十がらみの男が、横柄な態度で鎮座していた。

「あんたね、インネンつけてきたって奴やつは!?」

「それは外聞が悪いですな。正当なる抗議と言っていたきたい、ミリア王女殿下」

男は恰幅かつぶくのよさに相反した、陰湿的な声でねちやねちやとしゃべった。

既にギルド長から話を聞かされているのか、ミリアのことも知っていた。

「ファラヴァケと申します。殿下におかれましても、どうかお見知りおきを」

男はソファに座ったまま一礼する。

一見、丁寧きんぎんな拳措きんぎんに見えて、腰を上げようともしない慇懃無礼。

ミリアの額にぶつとい青筋が浮かんだ。

「おい。安い挑発に乗んな。おまえを怒らせて判断力を鈍らそうっていう、こっすい手だぞ」
 リクドーは右から耳打ちして、忠告する。

「殿下。このファラヴァケは南大陸デナインでも一、二を争うほどの材木商でして。大陸全土で、手広い商いを行っております」

同時にギルド長が左から、ファラヴァケと名乗った男について補足する。

ミリアはまずリクドーへと、ついでギルド長へとうなずいた。

それから忠告を聞き入れてか、一度、深呼吸。

改めて、ファラヴァケの対面に腰を下ろした。

リクドーは兵士として、背後はたに侍る。

ギルド長も王女と同席する無礼は避け、立ったまま脇に。

「で？ 『正当なる抗議』とやらを聞かせてもらおうじゃないの！」

勝ち気なミリアは、ケンカ腰になるのは抑えられない様子で、話を切り出した。

「単純明快な話ですよ」

ファラヴァケはねちやねちやと語った。

「エーンケスターの田舎者いなかは、田舎者同士の商いで満足していただきたい。お国の外にまでノコノコ出てこられると、私の商売の邪魔になって仕方ないですよ」

「そのどこの『正当なる抗議』よ!? あんた、なんの権利があつてゴーマンほざくわけ!」

ミリアのこの言葉こそ、まさに「正当なる抗議」だった。

だが、さすがファラヴァケはふてぶてしく居直つて、

「権利? ククク、なんの権利と仰るか。クククク……」

ひどく癩かんに障さわる含み笑いを漏もらすばかり。

そして、ひどくもったいぶった口調で、早や勝ち誇つたように答えた。

「私は然さる偉大なる神の、後ろ盾を得ておりまして。もし、私の抗議にあなた方が耳を貸さなかつた場合、きつと想像するだに恐ろしい神罰が、あなた方に下ることとなりましょうな」

この世界に、これ以上の正当な権利はないとばかりの、口ぶりであった。

「やっぱ邪神しかないじゃないのよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

ミリアは憤慨のあまりに絶叫。

リクドールの方を振り返つてにらみ、文句たつぷりにファラヴァケの方を指してみせた。

「ねえ? 弁明はある?」

「いや俺の仕業じゃねえしつ。俺は神様代表じゃないしつ」

「じゃあ、あんたはこんなアリだと思つ?」

「若い神々やっちに多いんだよなあ。俗世に過剰に関わりたがる奴。子どものケンカに親がしゃしゃり出るような真似して、恥はずかしくない奴」

リクドールは糾弾を回避するため、殊更に「ハアやれやれ」というポーズをとる。ミリアと一緒に非難するスタンスをとる。

いや実際、同じ神として恥ずかしいという想いは本音だが。

ミリアはファラヴァアケに向き直り、

「で？ 誰なの、その恥ずかしい若輩者は？ どこなんて、神を自称する生き物ですって？」

「なんと神を畏れぬ傲岸不遜……。その罰当たりな口の利き方、すぐに後悔しますぞ？」

ファラヴァアケはさも敬虔な信徒を装い、ミリアに非難を返した。

そして、まるで己の力を誇示するような尊大さで、その神の御名を唱え始めた。

「我が魂の故郷は槍葉樹林ニルナラ！ そして、かの地を聖域とし——」

「えつつつ!? ちよつ、まつ」

聞いた途端、リクドールは顔色を蒼褪めさせた。

立ち込める暗雲を幻視した。

「—— 護り、安んじ奉る御方こそが我が神！ 雷の姫！ エクレア様にございます!!」

「ぐあああああ、マジかよっ！」

リクドールは額を手で押さえた。

その激しい反応にミリアまで釣られて、目を白黒させながら、

「誰よ、そのエクレアって!? ヤバい奴!」

「俺がこの世で一番、顔を合わせたくない奴のひとりだよ！」

簡単に説明した。

エクレアは五つもの《龍脈》を有し、三度の飯より戦いを愛する、強力な神。

そして何より――

彼の主神に当たるオードランが、目に入れても痛くないほど溺愛している、愛娘まなむすめであった。

その内海はいつ何時も、鏡のように凧いでいた。

地力溢れるがゆえに、それでいて水が淀むことは決してない。

極めて透明度の高い水面が、空の青さをあますことなく映し、また水底の白い砂や、色とりどりの魚たちの姿を透かし見せる様は、神秘的なまでに美しい。

ついた名が、セレントアルト鏡海。

雨の神オードランが領有する中で、最も強力な《龍脈》としても知られる。

内海中央部に浮かぶ大きな島が、彼の御座所であった。

そのセレントアルト神殿は、むしろ宮殿と表現すべき、荘嚴絢爛な建造物。

百年に亘って増築が続けられ、今なお広がっていくその偉容は、実に町一つ分よりも巨大な代物となっている。

シンブルな景観を持つ鏡海とは正反対の、ゴチャゴチャとした内部構造。

ゆえに余所者にとっては一種、迷路の如き様相を呈す。

そんな中をリクドールは、酒杯を片手に彷徨い歩いていた。

本日は一月一日。

オードランが麾下の従属神たちを集め、盛大な新年の宴を催していた。

全員集合を厳命され、リクドローも洪々参加していた。

だが、宴もたけなわとなって皆へべれけ、オードランも「少し休憩をとる」と言って中座したのをこれ幸いに、リクドローは抜け出していた。

そうして複雑な模様を描く、回廊から回廊へと渡り歩くことしばし——
行く手に、小動物の姿を見つけた。

世にも珍しい黄色の毛皮を持ったモモンガが、赤い絨毯の上をチヨロチヨロと歩いている。

「よお、ビリー！ 搜したぜ」

「これはリクドロー様。宴の方はどうなさったんですか？」

さらに世にも珍しいことに、このモモンガはクリバラ語をしゃべる。

だが、知己のリクドローは驚きもせず、

「もう帰ろうと思つてな。でも、おまえの御主神サマに一言、挨拶しておかなきゃ、後でうるさいだろ？ 案内してくれるか？」

「ははあ、なるほど。承知いたしました。このエクレーア様の騎士、ビリーにお任せあれ」

「恩に着るぜ、電気ネズミ」

「ボクはネズミではなくてモモンガだと、あれほど言っているでしょう！」

ビリーは目を尖らせ、毛を逆立たせると、全身から静電気を放電させた。それをリクドールの方へ、ぴしばしとぶつけてくる。

「痛ててっ、オイ乱暴すんな！」

「リクドール様はこの迷宮の中を、永遠に彷徨っててください！」
逃げるビリーをリクドールは追う。

その間も、ぴしばしと静電気をぶつけられる。

でも、根が律義なビリーはなんのかんのと、御主神のところへ連れていってくれた。

ちよほど宴会場が見下ろせる、バルコニー。

大きな寝椅子が設えられ、二人の娘がからみ合っていた。

ひとりは目を瞠るほど美しい少女。

いかにも鼻っ柱が強そうなのに、可憐さは全く損なわれていない、反則的に整った顔。
ドレスに包まれた幼い肢体は、信じられないほどに華奢で、四肢は優美で伸びやかだ。

巻き毛の癖が強い赤髪は、寝椅子から流れ落ちるほどに豊かだった。

もう一人の唇を、夢中で吸っていた。

「え、エクレア様っ。お戯れはダメですっ。どうか……どうか……お許してくださいっ……」

「ダメじゃ、ダメじゃ。妾は決して許さぬぞ」

そう言って逃げる唇を、追いかけてはまた吸い付くの繰り返し。

そんなエクレアに襲われている、今一人の見覚えもリクドローにはあった。

確か、このセレントルト鏡海の巫女だ。すなわち、オードランに仕える巫女だ。

つまり、紛うことなき浮気現場だ。

宴会場の真上にあるこんなところで、ついさっきまで当のオードランもいた目と鼻の先で、娘たちは背徳の享楽に耽っている。

「あつ……ダメです、エクレア様つ。ダメつ……ダメえつ……♡」

巫女はそう主張しつつ、本気ではイヤがっていないかった。

「甘露、甘露♡」

とエクレアは、巫女の唇を一層強く吸っては、悦に入る。

そんなふたりにツッコんだのはピリーだった。

「あのー……お取り込み中のところ、申し訳ないんですがー……」

「キヤアツ!？」

陶然としていた巫女が、我に返って上半身を跳ね起こす。

そしてピリーと、ばつが悪くて頭をかいていたリクドローが、遠巻きにしていたのに気づく。

「ち、違うんです！ これは違うんです！ 決してオードラン様を裏切って、姦通しているわけではなくて！」

巫女は顔面蒼白で狼狽し、全く言い訳になってない台詞を叫ぶと、着衣の乱れも直す余裕な

しに、逃げ去っていった。

「あ、大丈夫です。ボクも騎士パラディンの端くれなので、密告なんてしませんよ」

「俺おれもなんも見てないんで。君子危あやうきに近寄らず主義なんで」

と安心させようとしたのだが、まるで耳に届いていない様子だった。

「あーあ。いたいけな巫女を泣かせてしまったのう」

「泣かせるような真似まねをしたのは、エクレア様でしょ？」

ビリーにツッコまれたが、エクレアは意にも介さず、伸びをしながら起き上がった。

すると、彼女の忠実な眷属ガイズたるビリーが、ガミガミと続ける。

「いい加減、オードラン様の巫女にお手をつけるのは、おやめになつてくださいよ。こっちが心臓に悪いです」

「仕方がなからう。父上はよい《龍脈》ばかりを持つておる。巫女むすめらの唇もまさに甘露。特にここ、セレントルトは最高じゃ。妾もつい、つまみ食いがやめられんのじゃ」

「それ全然、仕方なくないですよね!? いつかオードラン様にバレますよ? つまみ食いの最中に、大目玉喰くらいますよ?」

「たわけ。父上はとつくに気づいておるよ。その上で、見て見ぬふりをしてくれておるだけじゃ。父上は妾には甘いからのう」

そう言つて彼女は、ただの少女にはまずできない、悪辣あくらつな笑みを口元に浮かべた。

巫女と総称されるだけあり、『龍脈』が神々との媒介役として白羽の矢を立てるのは、必ず女性と決まっている。

ゆえにエクレアのような女神たちは、巫女たちと契る（性的な意味で）ことができない。ではどうするかというと、巫女たちと接吻を交わすことで、代わりになるのである。

このお手軽さは、リクドールら男神たちにはない特権だ。

女神もある種、巫女的な性質を有す存在であるために、男神たちより容易な手段で『龍脈』と霊路をつなげられるというのが、その仕組みだった。

そして、女神たちの味覚は、巫女たちの唇から地素を吸い上げる時、文字通り「甘く」感じられるのである。

しかも、より強力な『龍脈』の巫女であるほど、美味なだった。

「あーあ。せっかくの栄養補給が不意じゃわー」

「地素は栄養素じゃねえから」

「そんなんわからんじゃろー。妾は早ようこのちんちくりんの体から、ばいんばいんの垂涎^{すいぜん}ボディになりたいのじゃ。リクドールだってその方が好みじゃろう？」

「おまえも神なんだから、成長も外見変化もするわけねえだろ」

リクドローは巧みに、好みについての言及を避けた。

「妾は正真の神ではないもの。半神じゃもの。ゆえに、もしかしたら成長することもあるかもしれない。大昔に実例があると父上が仰おつしやっておった」

「オードラン様は、最古の神の一柱であらせられますよ？」

と、ビリーが横からツッコみ、

「その御方基準で『大昔』ってどれくらいなんですか」

「数千年単位？」

「奇跡の事例にもほどがありすぎるだろ」

と、今度はリクドローがツッコむ。

「ええい、細かい奴やつじゃ！」

左右からやられて、エクレアは頬ほおをふくらませた。

そんな顔をして愛らしいままなのが、この少女は卑怯ひきょうなのだが。

(まあ、奇跡つつつたら、神に子どもができること自体、奇跡レベルなんだけだな)

百年前の神々降臨後、オードランと雷平かみなりへいげん原ヴァルグレアの巫女との間に、彼女は生まれた。

御年九十八歳の、極めて年若い半神だ。

普通は、神々は子を儲もつけることができないからこそ、オードランはエクレアを溺愛している。

そのワガママ令嬢が言い放つ。

「ともあれ、おぬし。よくも妾の楽しみを奪ってくれたな？ 当然、責任はとってくれるのじゃろうな？」

と、リクドーに向けて流し目をくれる。

いとけない外見には不相応の、妖艶ようえんな色香が漂よよう。

いや、童女の如き外見だからこそ、背徳的なまでになまめかしいのかもしれない。

小さな手で、ぼんぼんと自分の隣たなを叩く。

リクドーは仕方ないなと嘆息し、広い寝椅子に腰を下ろす。

「最後に挨拶に來ただけだよ。すぐ帰るからな？」

「なんじゃ、もう帰るのか？」

エクレーアは逃がさぬとばかり、リクドーの膝ひざへ上体を覆いかぶせた。

特殊な性癖の持ち主ならば、ふくらみかけの胸部の感触が堪たまらなかつたかもしれないが、

生憎あいにくとリクドーはノーマルだ。

「久しぶりなのに、ツレないではないか。前に会ったのはいつか、憶おぼえておるか？」

「前回の新年の宴だったから、一年ぶりか？」

「その通りじゃ！ 今日くらいはゆつくりしてゆけ。せっかくの逢瀬おうせなのじゃ。たつぷりとし

ようぞ？ 妾は若いし体力はあるゆえ、一晩中でも構わぬぞ？ 情熱的な夜にしようぞ？」

そう言つてじゃれつき、甘えかかってくるエクレーア。

良識ある者が聞けば、「まあ、ふしだらな！」と目を剥きそうな台詞だが、絶対にだまされ
てはいけない。

このエクレアは重度の「大戦」ジャンキーである。

戦いに恍惚を感じる変態である。

そう、『好敵手』と書いて『想い人』、『決闘』と書いて『逢瀬』、『血みどろの殺し合い』と
書いて『男女のまぐわい』って読むノリの、イタいお嬢様なのだ。

誘いかけられ、「じゃ、じゃあ、あつちの人氣のないところへ……」などと連れ込もうもの
なら、しつぽりと楽しむどころか逆に、こんがり焼かれてひどい目に遭うこと請け合い。

楽しいのはエクレアばかりというオチだ。

「さあ、リクドー。一緒に最高の思い出を作ろうぞ」

「冗談じゃねえよ！ おまえみたいなバケモンと戦わされるなんて、真つ平だつ」

エクレアは最古の神譲りの靈力を持つ、そんじよそこの神々よりも、遥かに強力な一柱な
のだ。ぶっちゃけ南大陸でも、屈指の実力者であろう。

「なんなら逢瀬が終わった後、燃え上がった流れでそのまま、妾が百年間守り通してきた処女
を、おぬしにやってもよいぞ？」

「おまえの貞操、軽いんだか重いんだか、どっちかにしろよつ」

「もしリクドーが勝ったら、妾の《龍脈》一個やるから。負けても何もとらないから」



「どんな条件つけられてもやらねえってば！」

「のう、戦^やろうぞ〜。ふたりにで楽しいこと、戦^やろうぞ〜」

エクレアはもはや説得を放棄し、ただの駄々っ子と化した。

起き上がると、リクドールの膝上に乗っかり、体を前後に揺する。

特殊性癖の持ち主だったなら、少女のお尻^{しり}の感触がさぞ堪らなかつただろう。

しかし、リクドールは断じて違^{ちが}うので、惑わされない。

「おまえだけしか楽しくねえって言っただよ！」

「さきつちよだけがいいから〜、さきつちよだけ〜」

「どこでそんな言葉、憶えてくんだよ……」

「戦^やつてくれぬのならば、父上に言いつけるぞ！」

「ああ、言ってこいや。いくらオードランでも、お遊びで《龍脈》賭^かけたって聞いたら、丸二

日くらい説教してくれるだろうぜ？」

「うっ……。それはそうじゃな」

エクレアはがっくり肩を落とした。

「……やむをえまい。こたびは諦^{あきら}めることにする」

しおらしい態度になって、リクドールの膝から降りる。

二人で立ち上がって、向かい合い、別れの挨拶をしようとする。

その、矢先のことだった――

「リクドー！ あの腰抜けジジイめ!!」

ずいぶんと酔っ払った様子、若い男の声が階下から聞こえた。

途端、エクレアの双眸そうぼうが、冷たい怒りで雷の如き眼光を帯びる。

ふたりで、バルコニーから宴会場を見下ろす。

ゲオルグという名の、まだ五百歳くらいの若い神が、他の神々ほかを取り巻いて、演説紛いにつぶっていた。

「オードラン様にも匹敵ひつてきしよう、最古の神の一柱というからには、どれほどの大神かと一目置いていれば……！ オードラン様に敗れて以来、この百年もの間を一度も戦わず、一つの《龍脈》も勝ち取ってこず、まだ犬コロの方が飼っていて、番の役に立とうというもの！」
いかにも嘆かわしげに、陰口を叩き続ける。

同じオードランの従属神だ、リクドーはいわば同僚。

あるいは、ひとりの主君に仕える、武将同士のようなもの。

でも、だからこそだろ。

ずっと抱いていたらしい鬱憤うつぶんを、嫉妬を、ゲオルグは酒を燃料に爆発させていた。

いや、彼だけではない。

「ゲオルグの言う通りよ！」

「奴の名を耳にただけでオレなどは、虫唾むしずが走る想いを禁じ得んわ！」

「世にこんな不条理が他にあるか？ 十大《龍脈》の一たるヴェステル火山は、未だいまあの腰抜けが領有しておる」

「一度も使わず、使われず。まさに宝の持ち腐れではないか」

「オードラン様は、なぜあの惰弱から取り上げてしまわぬのか。不敬を承知で申し上げるが、理解に苦しむ」

「確かに、雨の神であらせられるオードラン様には、無用の長物であろうが……」

「ならば我らのいずれかに、下賜かしてくださつてもよいものを！」

「然しかりよ。さすれば我ら、たちまちにして数多あまたの《龍脈》を切り取りて、主神に忠義を果たせようものに……っ」

「リックドーの如き腑ふ抜けとは、違うところをお見せできようものに！」

「姫といい、主神といい、なぜかリックドーにはお甘い。天道を危うくいたしますぞ！」
ゲオルグらは好き放題に言っていた。

そのたびにエクレアは齒軋ざしりし、目尻めじりが吊り上つていく。

しまいには無言で、階下へ飛び降りようとした。

「まあまあ、あいつらの言う通りだつて」

リクドローは、エクレアの機先を制す完璧なタイミングで、彼女の華奢な肩をつかむ。

「新年くらいあいつらにも、ガス抜きさせてやろうや？」

「……おぬしはそれでいいのか？ 悔しくはないのか？」

エクレアがひどく押し殺した声で確認する。

殺気にまみれた眼差しは、ゲオルグらからびた一文動かない。

「ははっ。もうそんな歳じゃねえって」

リクドローは鼻先で笑った。

ともにバルコニーから、連中を見下ろしながら。

それで自分が心底、彼らを歯牙にもかけていないことが、エクレアに伝わったらしい。

「フンッ。おぬしがそう言うのならば、よかろう」

つかんだままの彼女の肩から、力みが抜けた。

リクドローは離れたその手を振って、今度こそエクレアと別れた。

そして、彼の気配が完全にセレントルト神殿から去った後——

「さて、リクドローはああ言ったが……妾があやつらへ天罰を下すのに、何か躊躇うべき理由は

あるかや、ビリー?」

エクレアは足元をちよろちよろしている、忠実な騎士パラディンに問うた。

「ボクもお供いたしますとも! ……と、申し上げたいところですが」

「が?」

返答次第ではおぬしもただではすまぬぞと、そんな怒気を孕ほらんだ声で訊ね返す。

「ご覧ください。どうやらボクたちの出る幕はないようです」

「むむっ」

ビリーが指した方を見やり、エクレアはその言葉の正しさを認めざるを得なかった。

なぜならば、酔い醒ざましをしたオードランが、宴会場に戻ってきたからだ。

生まれた時から枯れ木のような老人の姿をしているはずだが、強大極まる靈力アムラは総身から溢れかえらんばかりである。

この父親がどれほど偉大な大神かといえば——

タイクーン世界には四つの大陸が存在し、ここ南大陸デナインもその一つ。

大戦ク 最初期には、数十の神々がデナイン全土に聖域サンクチュアリを有し、自分勝手に覇を唱えていた。

だが、百年が経たつ間に、弱者たちは淘汰とうたされ、逆に強者はより多くの《龍脈》を手に入れ、

また敗者を従属神とすることで、さらなる一大勢力となつていった。

そして、現在では四大勢力に収束し、その主神たる四柱デナインが南大陸の覇権を獲とるべく、果てし

なき抗争に明け暮れているという状態であった。

四大勢力は見事に拮抗きっこうしており、互いに《龍脈》をとつたりとられたり、南大陸デナインにおける大戦は、泥沼の様相を呈している。

逆に言えば、彼ら四大神はそれだけの実力者だという証左である。

雨の神オードランは、その四大勢力の一角。

南大陸デナインに——ひいてはタイクーン世界においても、屈指の大神であった。

その眼力は、海原すら呑み込んでしまふほど底知れず、五百歳や千歳そこらの若神こそうどもでは、ただのにらみ合いですら太刀打ちできない。

リクドールの陰口で盛り上がっていたゲオルグらは、一瞬で酔いが醒めたようになった。

縮み上がった彼らを、オードランはぐるりと睥睨へいげんし、

「ヴェステル火山は、このワシの軍門に降る前から、リクドールが領有していたものよ。それをワシが取り上げなかったからといって、リクドールが誇そしられる謂いわれがどこにある？」

豪雨よりも重苦しい声音で言った。

「十大《龍脈》は、残り九つ在るのだ。貴様らが、自分たちで息巻いてみせるほどに、真に優れた神だというのならば、いくらでも戦で奪いとつてくれればよい。ワシはそれを取り上げることもせん。確約しよう」

昼行燈ひるあんどんのリクドールとは違い、オードランはまさしく最古の神らしい神である。

その放つプレッシャーにやられて、ゲオルグらは次々と平伏していく。

何も異存はございませんとばかりに、己おのれの首をいつでも差し出しますとばかりに。ただただ、恐懼きょうくしていた。

上から眺めいたエクレアからすれば、手を打って喜びたいほどの痛快事。

「さすがは父上じゃ。道理をわきまえておられるだけでなく、大海よりも度量が深い」

「ただ、決して不満があるわけではないんですが、ちよつと不思議でもあります」
黄色いモモンガの姿をした騎士が、足元で短い首を捻ひねった。

「何がじゃ？」

「エクレア様がリクドロー様をお好きなのはわかるんですよ。かくいうボクも、気さくな方だと思えますし、好きです！ ただ、オードラン様まで、なぜか特別扱いされてますよね？」

「ぬしも父上は、リクドローを鼻ひいきしていると思うか？」

「正直。チラリとは」

「まあ無理もない。じゃがな、別に父上は鼻ひいきなどしておらんよ」

「じゃあ、どうしてヴェステル火山を、取り上げないんです？」

「ふふん」

エクレアは我がことのように、得意げに鼻を鳴らした。

「父上は鼻ひいきをしておるのではない。遠慮をしておるのだ。もつと言えは——」

と、遠い昔のことを語って聞かせてやる。

なぜ主神たるオードランは、従属神のリクドーに、十大《龍脈》を預けたままにしているか？
誰だだれって疑問に思う。

エクレアだって思う。

だから九十年くらい前に、父神に、直截ちよくさい的に聞いてみた。

「我が娘よ、肝に銘じておくのだぞ——」
オードランはひどく形相を歪ゆがめ、こう答えた。

「あ、の、リ、ク、ド、ー、こ、そ、は、こ、の、世、で、最、も、油、断、な、ら、ぬ、腹、黒、狸、」

そこに浮かんだ表情は、紛れもない怯えだった。